

『近世儒学と中国・朝鮮』 立命館大学COE研究員 石黒 衛

ではお話しさせていただきます。「近世京都の学問と東アジア」というテーマのもとで私に与えられた課題は、「近世儒学と中国・朝鮮」でした。このテーマはあまりにも広く、どういふ話をすればいいのかと考えておりましたけれども、今日来ていただきました龔穎先生そして成海俊先生が、江戸の書物を中心にお話しして下さるといふことでしたので、私も書物の問題に関わらせながら近世京都の学問についてお話しさせていただきますと思います。

1. はじめに

先ほどの高橋先生のお話にもありましたように、そもそも日本の近世・江戸時代において、何の形容詞もつけずに単に「学問」「学文」といえばそれは儒学を意味していましたし、また学者といえば儒者を意味していました。そして「近世儒学の祖」と称される藤原惺窩に始まる日本の近世儒学は、ここ京都からその営みが開始されています。また惺窩の門人で、徳川家康に仕えることになる林羅山や、彼らを批判しながら登場した山崎闇斎や浅見綱斎、その同時代で同じく京都の堀川で朱子学そのものを批判した伊藤仁斎、あるいは石田梅岩など多くの個性的な儒者を京都は輩出しています。そして彼等のもとには全国から多くの門人たちが集まっています。先ほどの高橋先生のお話では、近世前期では師匠がいなかったという話にもなりましたけれども、集まってきて、修学を終えたある者は大名にかかえられ、ある者は国元に帰りその技術をいかして家塾を開く。また各地に藩校ができるようになると、そこで儒学を講じることにもなりました。つまり近世京都は学者の供給地でもあったわけです。ただ、近世中期以降、全国への儒学の普及に伴って、京都の地位は相対的に低下するとも言われますが、例えば『平安人物志』という書物は、京都に遊学してくる者たちに向けての案内書で、どこにどういふ人物が住んでいて、何を教授しているかという案内書ですが、これが幕末に至るまで何度も何度も改訂されて出版された事実があります。そういうことを考え合わせれば、学問都市としての近世京都の重要性は理解されてくるだろうと思います。

さて、彼らの学んだ儒学とは、宋明儒学、特に中国宋代に成立する朱子学でありました。理気二元論をその根底に据えて、宇宙論、自然学、人間学、道徳論を包括する哲学体系である朱子学は、現在の中国、韓国、日本を含む前近代の東アジアの文化圏において普遍的な思想として展開されてきました。それ故日本における朱子学の問題を考える上では、単に近世日本の列島上に展開された思想史的問題として考察するだけではなくて、明清儒学や朝鮮朱子学（朝鮮性理学）との関連でなされる必要がある

でしょう。そもそも藤原惺窩からして、その出発点には朝鮮の朱子学者姜沆との出会いがあったというのは周知の事実です。姜沆は壬辰倭乱の際に捕虜として連行された一人でありますけれども、藤原惺窩は、彼の影響のもとで新たな学問的営みを始めています。つまり京都から始まる日本の朱子学は、そもそもの始まりにおいて宋明儒学あるいは朝鮮朱子学が存在していました。

では以下より、近世前期の日本における朱子学の成立・展開を、京都を中心に活動していた藤原惺窩門・山崎闇齋門の活動を中心に、書物の問題を絡めながら見ていくことにします。

2. 藤原惺窩と京学派朱子学

まず山崎闇齋を登場させますけれども、山崎闇齋は日本における朱子学の伝来を次のように述べています。

「朱書の本朝に来る。凡そ数百年。独清軒玄恵法印始めてこれを以て正となすも、未だ仏を免れず。藤太閤（一条兼良）も亦た以て程朱の新釈、肝心となすべしとなすも、猶ほ仏に惑ふ。遂に実にこれを尊信する者を聞かざるなり。慶長元和の際、南浦（文之）自ら「これを信ず」と謂ふも、亦た仏を尊び、惺窩自ら「これを尊ぶ」と謂ふも、亦た陸を信ず。陸の学たる、陽は儒、陰は仏。儒は正にして仏は邪。その懸隔すること、ただに雲泥のみならず」

闇齋は鎌倉時代の朱子学移入から藤原惺窩惺窩までの日本の朱子学の歴史を批判的に述べているわけですが、当時の儒学は京都の禅林や五山において仏教に従属する形態を取り、神道家の教説や儒学を家職とする清原家のような博士家に独占された形での存在であり、儒学が決して独立した地位を占めていたわけではありませんでした。そうした禅林や朝廷の厚い「伝統」というか蓄積をもつ京都の学問市場に宋明儒学をもって参入したのが藤原惺窩であったといえます。新たな学問を打ち立てようとする場合、先行する「伝統」や「権威」に対する挑戦がなされていきますが、惺窩が当時としては全く異様な風体であった「深衣道服」という儒服を着て家康の前に謁見したり、あるいは羅山が家康に自らを売り込んでいった、また清原家と確執を起こすなど、これらは多分に林家によるフレームアップであるともいわれますが、こういったことにも新たな武家権力に寄り添う形で登場する近世における新学問成立の事情が示されているといえます。

さて藤原惺窩であります。彼もまた相国寺の禅僧でありましたから、京都における学問的伝統の住人であったわけです。その彼が仏教から儒学へ転向したのには、先述の朝鮮の儒者姜沆との出会いがありました。姜沆は朝鮮朱子学の、先ほど成先生のお話にもありました李退溪の学派に連なる学者です。惺窩はこの姜沆の影響のもとで李退溪の『天命図説』によって朱子学の研鑽に励み、また、朱子の編纂した『延平答問』を尊信し、「理一分殊」説や「洒落」の境地に至ります。惺窩の尊信した『延平

答問』は李退溪の翻刻によるものであったと、阿部吉雄氏も述べています。

惺窩の儒学の特色としては、よく知られていますけれども、先の闇齋の史料でも批判していましたが、朱子学・陽明学の弁別にこだわらない、あるいは両者に通ずる「異中の同」を求める、あるいは宋明儒学全体に包摂的であり、知的・分析的というよりは、人倫的な実践を重んじた等々の指摘がなされていますが、全体として渾一的な主体としての「心」の確立を目指したのだということが言えます。惺窩のこうした動向には、中国明代において三教融合論を説いていた林兆恩等からの影響も指摘されています。

さて、惺窩は盟友赤松廣通による新注の和刻本『四書五経』公刊に際し、姜沆にその跋文を依頼しています。

「予幼より師なく、独り書を読みて自ら謂へらく、『漢唐の儒者は、記誦詞章の間、纔か音訓を注釈し、事跡を標題するに過ぎざるのみ、決して聖学誠実の見識なし』と。

(中略) 故に赤松公、今新たに四書五経の経文を書し、予に請ひて宋儒の意を以て倭訓を字傍に加え、以て後学に便せんと欲す。日本の宋儒の義を唱へんとする者はこの冊を以て原本となさん」

ここには古注から新注へ、漢唐の訓詁学から宋儒の新儒学への宣言が「日本の宋学を志す者はこれを原本とせよ」という、自らがパイオニアたらんとする意思が高らかに謳われています。ここで注意しておきたいのは、惺窩自らが朱子学テキストの選定に関わっていることです。近世前期は先ほどの成先生のお話にもありましたけれども、大量の朝鮮本の流入、そしてそれらを底本とした朱子学テキストの印刷が盛んに行われていた時代でもありました。壬辰倭乱によって大量の朱子学関係書物が日本にもたらされて、また同時に印刷器具一切、大量の銅活字がもたらされています。朝鮮からの印刷技術の到来は、京都を中心とした出版文化の成立ももたらしたわけです。そしてその出版文化の成立の中で、朱子学基本書の出版を担っていたのが藤原惺窩の門人たち、いわゆる京学派の儒者たちでありました。宇野田尚哉氏は、近世期における朱子学の基本的なテキストの刊本を丹念に調査され、そのほとんどが京学派の手によるものであることを指摘されています。近世日本の朱子学は、京学派による朱子学基本図書の諺解であるとか、あるいは標注書の和刻本を媒介としながら、より広い人々へと開かれていったといえます。

先の史料で「倭訓を字傍に加へ、以て後学に便せん」とありました。そうしたテキストの出版が初学者に向けてなされていったわけです。江戸時代における学問の特質の一つは、一部に独占されていた知識がより広い人々に開かれていったことでもあります。それは儒者たちの出身の階層を見ても理解されるでしょう。惺窩や羅山、闇齋はもともと禅僧でしたし、伊藤仁斎や石田梅岩らは町人でありますし、浅見綱齋はもともと医師でしたから、志さえあれば誰でも学問をすることができる状況が、近世前期を少し超えた辺りから出てきたのだということです。

では、京学派によって開かれていった朱子学の世界の特徴とはどのようなものだったのでしょうか。ここでは『性理字義』というものを取り上げてみたいと思います。

『性理字義』は朱子の門人陳北溪の手になるもので、北溪自ら「道德生命の蘊、陰陽鬼神の秘、固より初学の驟に窺うべきところにあらず。苟もまずその名義を析ち、その趣旨を発して」と述べていますように、初学者のために「命」「性」「理」等々の性理学の基本概念の意味を解説したテキストです。この書は近世日本において早い時期から流布しており、朝鮮本・漳州本といわれる二系統を底本にした（1）元和活字印『北溪先生性理字義』元和四（一六一八）年以前に出版（2）寛永刊『北溪先生性理字義』寛永五（一六二八）年、寛永九（一六三二）年（3）寛文刊『重刊北溪先生性理字義詳解』寛文八（一六六八）年（4）寛文刊『北溪先生性理字義』寛文十（一六七〇）年（5）刊年不明『北溪先生性理字義詳解』の五種が現在確認されています。伊藤仁斎がこの『性理字義』を換骨奪胎する形で『語孟字義』を著したことも考えあわせれば、近世日本における広がりとその位置を理解することができます。

さて、ここで注目したいのが（4）の寛文十（一六七〇）年刊行の『北溪先生性理字義』です。これは京学派に連なる熊谷了庵によって刊行されたものですが、ここには京学派朱子学がいかなるものであったのかが示されています。すなわちこのテキストは、白文テキストに一二点を振り、レ点、オコト点、送り仮名を振り、そして頭注には「字彙に曰く」「朱子に曰く」云々というように、細かな字によって出典・意味が記されています。これはもともと『性理字義』自体は解説的なテキストであったわけですが、その解説的なテキストである『性理字義』をさらに敷衍して解説していくわけですが、先に大量の書物の流入があったと申しましたけれども、ここにもたらされていたのは、当時明末に販売されていた漢籍でもありました。明初永楽帝が宋代・元代諸儒の注釈を編纂した『性理大全』『五経大全』『四書大全』を編集させ、朱子学をもって科挙の正統として以来、注釈に注釈を重ねるような大量の末疏が生み出されていきました。京学派の儒者たちは、『四書大全』も和刻本として刊行していきませんが、まさに大全風朱子学として近世前期の朱子学は成立していたといえます。

さて、この『性理字義』にいち早く注目したのが、林羅山でした。彼は元和七（一六二一）年には朝鮮本の『性理字義』を手写しております。それをもとに『性理字義諺解』を著しました。また藤原惺窩は陸王学も認めて、「異中の同」を求めるような包括的な思想の持ち主であったわけですが、それに対して林羅山は異端を激しく排撃し、先ほどもありましたように朱子学を尊んで、朱子一尊主義をとろうとします。その朱子一尊主義を標榜した羅山によって『性理字義』が見いだされてきたわけです。

その羅山は次のように述べています。

「字義を識らずんば、則ち聖賢の書を読み難し。其の書を読まずんば、則ち其の言を知り難し。其の言を知らずんば、則ち何を以てか聖賢の心を得んや。（中略）余、『性理字義』を読み人の求めに応じて、常談を借り方言を借り、加ふるに国字を以てし、

之を諺解とす。蓋し人をして之を読みて曉り易からしめんと欲す」

字義を知らなければ聖人の書物を読むことはできない。そこで羅山は、ここでも「人の求めに応じて、常談を借り方言を借り、加ふるに国字を以て」とありますけれども、初学者のために国字によって『性理字義』の諺解を著したわけです。ここにも「人をして之を読みて曉り易からしめんと欲す」という啓蒙的なあり方が示されています。

ではその啓蒙的な作業とはどのようなものであったのでしょうか。もともとの『性理字義』の作者である陳北溪は、『性理字義』を「命」の解説から始めています。そしてその第一条を「命は猶ほ令の如しを論ず」というふうに題をつけて、「命は猶ほ令の如し。尊命、台命の類の如し」云々と始めていきます。ここで問題になる「命は猶ほ令の如しを論ず」の「命は猶ほ令の如し」というのは、『中庸』首章の「天命之謂性。率性之謂道。修道之謂教」の最初の部分の「天の命ずる」の「命」に朱子が振った注の一句です。朱子はこの部分、「命は猶ほ令の如し。性は即ち理なり。天は陰陽五行をもって万物を化生す。気はもって形をなし、理もまた焉に賦す。猶ほ命令の如きなり」と注釈していくわけですが、この朱子の注釈に対して陳北溪は、最初の「命は猶ほ令の如し」のみを切り取って「命」という概念を解説していくわけですが、当の羅山は、それを朱子学そのものであるとして受け取って、さらに和語に移し替えて出版して初学者のために開いていく、そういう構造を持っています。

羅山自身の説明を見ても、次のように述べています。

「命は令のごとしとは、今の世の仰せと云ふのごとし。上より下に令し君より臣に事を云ひ付てせしむるを命令と云ふなり。日本紀には命の字をみことのりとよめり。口にて云ひ聞かせて、なにせよかにせよと教へせしむるゆへに、令の字に口を加へて命の字とす」

ここに示されているような『日本書紀』を例に出しながら語る羅山の関心は、『性理字義』をいかにして漢文から和文脈に戻して解説していくかに注がれています。つまり羅山の作業とは、朱子後継陳北溪によって解説的に再構成された朱子学に、和語によるさらなる解説を積み重ねていく解説的・啓蒙的なものであったといえます。

近世初頭は宋明儒書が多数もたらされ、また印刷革命によるそれらを底本にした出版活動が京都を中心に盛んに行われた時期でもありました。そしてそれらを契機として成立してくる儒学をめぐる空間とは、惺窩に示されたような朱陸一致的なものであり、また、いま羅山に見てきましたように朱子後継による解説的に再構成された朱子学を朱子学そのものとして受け取って、さらなる説明を加えていく啓蒙的なものであったといえます。

3. 山崎闇齋と崎門派

そうしたあり方に批判を加えて自らの学問を打ち立てようとしたのが、山崎闇齋とその学派でありました。先ほどの史料でも示しましたように、闇齋は先行する学説を

大変批判的に見ているわけです。闇齋は日本における中世から惺窩に至る朱子学の歴史をみな仏教に惑っていたものとし、惺窩についても陸王学の影響のもとにあったと批判しています。闇齋に先行する空間が朱・陸・仏の混在する世界として成り立っていたとみています。また闇齋自身もそのような空間にいたわけです。

闇齋自身「嘉（山崎闇齋のこと）や往時、師友の導きなく、大全を反復し、末疏を追尋す。蒙引を得てより、これを尊信すること朱注の下にあらず」と、「大全」や「末疏」にならずで、朱子の注に拠っていなかったことを自戒しています。この京学派によって開かれたいわゆる「三大全」のような末書の氾濫する世界があったわけです。明代には「大全」にさらに字義出典等の注を付していくような学风が形成されたとされます。また同時に、朱子学への対抗として〈心学〉の隆盛が見られたともいわれます。朱子没後、朱子が一二〇〇年没ですから、朱子没後四〇〇年の儒学史が一度に流れ込んできたともいえます。

それでは闇齋とその後継者たちは、その京学派に対してどのような主張を加えていくのでしょうか。闇齋は自らの学問を次のように語ったとされます。

「門人に語りて曰く、我が学の朱子を宗とするは、孔子を尊ぶ所以なり。孔子を尊ぶは其の天地に準ずるを以てなり。中庸に云ふ、仲尼は堯舜を祖述して文武を憲章すと。吾れ孔子朱子に於いて亦竊にこれに比す。而して朱子を宗とするも亦苟も之を尊信するに非ず。吾れ意ふに朱子の学は、居敬窮理にして即ち孔子を祖述して差はざるものなり、と。故に朱子を学んで謬る、朱子と共に謬るなり。何の遺憾か之有らん。是吾れ朱子を信じて、亦述べて作らざる所以なり。汝が輩堅く此意を守って失ふこと勿れ」

これは有名な史料ですけれども、朱子の学は「居敬窮理」であって、古の聖人の教えを「祖述」した孔子を朱子は「祖述」して違うところがない。だから朱子を学んで誤りがあってもかまわないのだと主張しているわけですが、この「祖述」をもって自らの学問としています。そして書物に関して言えば、京学派が大全風の書物を次々と生産していったことに対して、闇齋とその学派は、外に対しては彼らの認めた朱子学の基本テキストを自らの意を加えることなく表彰刊行していきます。また学派内部に対しては、講義録と称して師の口吻をそのまま写しとるような戦略をとっています。そしてそれらの編集書や講義録のほとんどが、古の聖人から朱子に至る「道統」が語られ、そして同時に朱子後継たちを朱子の真意を得ていないとして退けていきます。

次の史料は浅見綱齋による講義の一部です。

「孔子に至て、堯舜以来の正脈を伝え得て、仁の一字を以て学者に示して、為学修徳の標準とせり。（中略）程子にいたり始て孔會思孟以来の正脈を得られて、仁の本旨復た明になりたれども、其門人に至て復た其旨を失て、（中略）朱子にいたり、程子の血脈を得られて、仁の旨復た明になつて、天下万世学者の心法標的とする為に、この説をかゝれたるぞ」

こういう形で闇齋学派の講義は進んでいくわけですが、闇齋たちは「述而不作」という方法によって己の立論の正しさを朱子に求めていきます。その朱子が継いだとされる「道統」に自らも連なろうとしていくわけです。闇齋学派では「道統」であるとか「血脈」「道学」という言葉が非常に重視されていますけれども、実は惺窩門人の間でも「道統」というのはやはり重視されていますし、惺窩門人の松永尺五は惺窩から「道統の伝」を受けています。ですから闇齋たちの批判というのは、一つに「道統」をめぐる争いでもあったということが指摘できるでしょう。

ところで、この闇齋たちが朱子後継たちに向ける視線は重要な視線であると思われます。それは朱子とその後継との間の差異を認識する視線であり、同時に朱子後継のテキストを朱子学そのものとして受け取っていた林羅山に代表される近世日本の儒者たちにも向けられるものであったからです。しかしこのことは、朝鮮朱子学との関連でも考察されなければなりません。阿部吉雄氏も強調していますけれども、朝鮮朱子学が異学異端を厳しく排斥し朱子学一尊主義をとったことは周知の通りです。李退溪もまた「道統」を重視し、朱子後継の言辞を排し、朱子その人を学ぼうとしました。そうした流れの中に闇齋たちもいたのだらうというように思われます。日常卑近な教えから離れ空虚な机上の空論に流れることを、闇齋も李退溪も俗論として退けています。その排されるべき典型が陳北溪の『性理字義』であり、李退溪は自らの『自省録』において北溪を批判していますし、闇齋もまた『文会筆録』において批判しています。

では、闇齋たちの『性理字義』を退けていく作業とはどのようなものであったのでしょうか。浅見綱齋は『性理字義』の講義をおこなっています。先ほど紹介しました「命」の条ですけれども、綱齋は次のように述べています。

「この条は全く云い損ないぞ。朱子中庸首章の注に、天は陰陽五行を以て万物を化生し気は以て形を成し、理もまたこれに賦す。猶ほ命令のごときなりとある命は猶ほ令のごとしの注にこれより外にいほうやうはないに、ぬし（陳北溪）が詞をたてられたゆえ命字の端的親切がみえぬぞ」

「命といふは、ひしひしと職分の当然を身の任とし、自らやまれぬやうに、身がそう生まれ付いているゆへ、命といふ。（中略）手あればもつべき物をもて、足あればあるべきところをあるけと指図あるが命ぞ」

これらは先ほど紹介しましたとおり、北溪の『性理字義』の「命」の条についての綱齋の講義の一部です。綱齋はこの条を陳北溪の全くの言い損ないであるとし、どこにその言い損ないを見るのかといえ、北溪が自らの了見で朱子の注を分節化して説明を加えているところです。綱齋は北溪によって朱子の文脈から切り離されて解説された「命」という概念を、朱子そのものに戻していこうとするわけです。そして日用卑近なものとして語ろうとする際に出てくるのが、「職分の当然」であるとか「身の任」あるいは「手でもて」や「足で歩け」の比喻を交えながらなされていく講義における言葉です。そこには朱子にも現れてこなかったような「身」への傾斜が生じてい

ます。

この「身」の問題構成については高橋文博先生が詳細に論じておられますけれども、闇齋学派において近世思想史上に初めて「身」の問題が構成されたといえます。闇齋学派の「身」をめぐるなされる問題構成も、闇齋に先行する三教一致的な「心」の言説、あるいは「心学世界」との対抗関係として考察されるべき問題でしょう。また李退溪との比較で述べるならば、李退溪は心の修練を重んじた思索的な学として朱子学を再構成したとすれば、闇齋はより「身」の修練を重んじて実践的な学として朱子学を再構成していったといえます。またこれらのことは、朝鮮性理学が「四七論争」に典型的なように、精緻な性理学を形成していった、あるいは理気二元論に関心が高いことに比べまして、日本では理気論が心身というレベルで受け止められてくるといふ指摘にも賛同できると思います。

4. 終わりに

以上、本報告では一七世紀の京都を場とした日本の朱子学の様相について、書物の問題もからめながら、主に思想内容を中心に整理を試みてきました。その流れというものも明清儒学の流れ、あるいは朝鮮朱子学、宋代以降の儒学の流れとともにあることを述べてきました。この近世京都という場に視点を据えて東アジアの思想史として考察されるべき問題は、まだまだ多くあると思われます。ここでは明清交代の問題を取り上げてみたいと思います。

最近、明清交代あるいはその華夷思想をめぐる諸問題が多く議論されています。これは国民国家批判あるいは前近代の国境を意識しない世界認識、天下世界の認識、そういうものへの関心から出てきた議論であろうと思われます。実際に一七世紀、中華である明が夷狄の清に取って代わられるという事態、これは中国・朝鮮・日本それぞれに大きな影響を与えていました。清朝では明朝の理念や政策を継ぐことが標榜され、夷狄であっても有徳の天子がその地位につけば中華であり、清朝こそがその中華であると宣言されていきます。一方朝鮮王朝では、清の侵攻に対して対明義理論や反清北伐論などを経た後、朝鮮こそが正当なる中華の継承者であるとする朝鮮中華主義が確立されていきます。また日本でも、桂島氏が述べていますように「礼文中華主義」というものから「日本中華主義」の台頭がみられていきます。それぞれの国は「中華」＝「文」の所在を争うわけです。そして中華の周辺に位置していた朝鮮王朝と日本において、ほぼ同時に自国独自の歴史、つまり自国独自の開闢神話が同時代的に見いだされていきます。朝鮮における檀君神話、日本においては天皇「万世一系」に結びつく『日本書紀』神代巻です。同時に、闇齋学派に特化されて言われているわけですが、生まれた国に忠誠を尽くすのだというような「生国意識」も成立してきます。これまで闇齋学派のみの問題として議論されてきましたけれども、実は明清交代を経た後にそれぞれが自国に中華を見いだした中国、朝鮮と日本の儒者に共通する在り方

ではなかったのかということです。近世の儒者において、天皇と絡めながら神道を語る者が圧倒的に多いというのもやはり気になることでもあります。近世京都における天皇の問題をいかにして東アジアにおける「中華」＝「文」の問題として議論できるのか、これは今後の課題になると思われます。

司会 長時間にわたってありがとうございます。コメントを今から頂戴しようと思います。コメントは神戸大学の宇野田尚哉先生にお願いしています。宇野田先生はご承知の方もいらっしゃると思いますが、もともと近世の荻生徂徠などを中心とする思想史研究をおやりだったのですが、近代に至るまでいろいろ幅広くおやりになっていて、批判的コメントということではまさに適任の方ではないかということをお願いしました。よろしくお願いします。